

## 【用途特集】不織布の新しい用途を探る（最終製品）

高い機能と快適さを併せ持つ  
シンガポール発の使いきり枕カバー

FEP 株式会社

日本製品は、その品質や性能において世界中で高く評価されている。しかし一方で、モノづくりにおいて、日本は素材や製造などにおけるコスト面のみで海外を見てしまっていないだろうか。それぞれ地域が持つさまざまな歴史や地理条件、文化などを背景に生み出された、世界で通用する商品や分野は豊富にあるはずだ。

1990年の設立以来、社名にある「ENVIRONMENT PLANNING」を掲げて、医療関連をメインにユーザー環境の向上のために商品提供に取り組んでいる FEP ㈱代表取締役の木下直義氏と営業部の中塚 藍氏に話を伺った。（文中敬称略）

本誌－御社について簡単に紹介をお願いします。

中塚－弊社は医療関連を中心に事業を展開し、液晶モニターや液晶テレビ、木製ラック、医療用消耗品などのサプライ製品を提供しています。地デジへの移行需要が一段落して次の新規事業について模索していたところ、一昨年の冬にシンガポールの企業の枕カバーと出会い、シンガポール政府も企業誘致に動いていたこともあって弊社が国内総販売代理店として取り扱うことになりました。

木下－自分のところで物をつくってメーカー機能を持つか、海外から製品を輸入しては販売総代理店になるか探していたところで見つかったのがこの枕カバーです。この類の商品はこれまで日本国内にはなかったので、販売総代理店と



なって販売を始めました。現在はこの製品に注力しています。

本誌－商品「Prefer™ 使いきり枕カバー」の特長について教えてください。

中塚－これはシンガポールの KIMUI 社の製品です。枕にセットした状態で表面側に不織布が1枚使用されていて、袋とじになっているこの形状は日本はもちろん、アメリカやカナダ、ノルウェー、オーストラリア、中国などでも特許を取得しています。

素材は裏面が防水加工、表面には肌触りをよくする加工がほどこされており、寝汗をかいたり飲み物をこぼしたりしても、また、病気の時などにも枕自体が汚れないようになっています。木下－シンガポールはもともと衛生立国で、例えば、タバコやチューインガムのポイ捨てなどに厳しい罰則があることはご存知だと思います。先進国に先駆けて環境問題やエコロジーなど、さまざまなことを国を挙げて取り組む国で、その中でも医療はかなり進んでいます。その医療

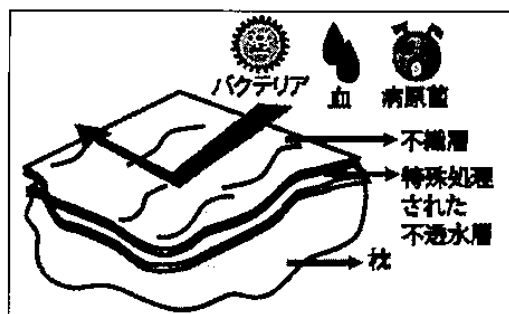
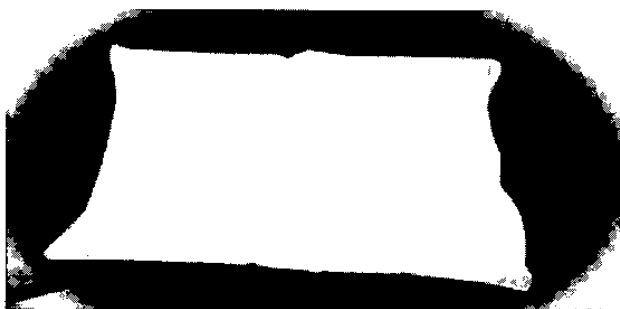


写真 Prefer™ 使いきり枕カバー（左）、図 不織布を外層に使用した3種の特種処理表面と保護層（右）

先進国のシンガポールで、病院というカテゴリの中で感染を予防するという観点からこのような商材が開発された経緯があります。

本誌—シンガポール製品について、日本のものを扱うこととの違いはありますか。

中塚—このような製品自体が日本にはなく、初めてのものですので、営業を進めている中で、こういうものがあるのだという反応に接するのが楽しいですね。カバーやシーツなど、日本では使用後に取り替え、洗って繰り返し使うという文化がありますが、シンガポールは衛生面に関する意識が大変高く、それらを使い捨てにするという面がもともとありました。

そして以前、呼吸器の感染症である SARS がシンガポールで広まった時に、枕を介した二次感染が防げるということで、シンガポール国内の約90%の病院にこの製品の採用が広がりました。

日本ではリネン業者さんなどが病院と契約して、病原菌などを病院外へ持ち出さないよう敷地内で洗浄と滅菌を行うのがいぜん一般的なのですが、そのために病院内に業務用洗濯機を設置する必要があります。この製品はポリプロピレン（PP）とポリエチレンテレフタレート（PET）ですので、使用後に焼却でき、また、燃やすことで有害なガスも発生しません。一般家庭でも自治体のごみ分別に従って処分ができます。

現在はインターネットショップやホームセンターなどへ販路を広げており、また、病院の売店コーナーや旅行グッズの店などでも取り扱っていただいています。

本誌—旅行に携帯して、宿泊先で使うというのは大変面白い着眼点ですね。

中塚—昨年、50～60代の主婦の方を対象にしたモニターテストを行ったところ、そのアンケートで旅行先のホテルや旅館の寝具の清潔感などが気になるので持っていきたいという声がかありしました。そこで、旅行グッズを扱うショップへアプローチしたところ、大変興味を持っていただきました。

木下—私たちはこの商品について日本の市場性を考えた時、将来的には別ですが、現状では病院は難しいと思っています。その理由は、一つには病院で洗浄、滅菌を請け負っているリネン業者さんとのバッティング。もう一つは患者さんがリネン代を負担されており、さらにこれを購入して使用するには病院側の持ち出しになることが挙げられます。

医療制度の問題で海外では日本のように保険証を持っていけば見てくれるという国はまずありません。日本は診察したあとにお金を払いますが、海外は自費診療ですから、風邪や腹痛などでもまずお金を払い、それから診察が受けられます。そのため、当然ながらそれなりのサービスの提供が必要になります。大金を払って治

療を受けたり入院する場所が、院内感染の危険がある不衛生な状態では困るわけです。そういう意味で、海外の病院はオープンな日本と比べてセキュリティチェックでも防疫面においても、はるかに厳しいものがあります。

そこで、病院へのアプローチでは売店に置いていただいているのですが、患者さんや家族の方などに売れているわけです。売店経由で、必要な方は購入して使っていただけるようになっています。

販路のターゲットとして病院は確かにその一つではありますが、それだけではなく、従来型の枕カバーの代わりとして、そのほか海外旅行へ持って行きたい方や家庭で髪の脂や体臭などに悩んでいる年配の方などへも周知していきます。マスクなど使い捨て文化というのは浸透しているのです、市場はあるかなと思っています。また、介護用や来客用、アレルギー対策としても利用されています。

本誌—アウトドアでの利用など、今後さまざまな展開が考えられますが、具体的にはどのようなことを考えておられますか。

木下—この商品の可能性は本当に大きいです。メイドインシンガポールではありますが、素材にはベルギー産のものを使っています。ベルギーはもともと繊維加工などが有名な国です。

現在の目標としては、ある一定量売り上げることができれば工場を現地へ持ってこれること

で KIMUI 社と合意しているのです、この枕カバーを国内で多く販売し、工場のラインをできるだけ早く日本へ持ってきたいと考えています。そして、メイドインジャパンにした上で色やサイズ、デザインを変えたりなどバリエーションを増やしていきたいと思っています。

実は、シンガポール国内では内部にある不織布が付いていないタイプが使われています。しかし、弊社では肌触りを重視する上で、不織布がセットされたタイプのものを輸入しています。この部分は現在無地なのですが、例えば企業の広告やイラストなどを印刷したりなど、アイデアは豊富にあります。

製造ラインを日本に持ってくるということについては、実はシンガポールの人件費は例えば大学卒で約24万円など、日本とほとんど変わりません。輸送コストなどはもちろん、製造における仕様変更も現場で迅速に、リアルタイムで行えるというメリットがあります。

また、枕カバーだけでなくこの素材を使ったベッドシートや他製品、ペット向け商品など、興味や関心を持たれた企業と協力して、さまざまな製品を生み出していければと考えています。

#### ■問い合わせ / FEP (株)

☎ 06-6241-0780 FAX06-6241-0710

URL : <http://www.fep-j.com/>

